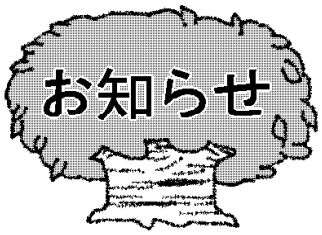
旭ヶ丘キリストの教会　ニュース



《今週の歩み》

２/16(日)聖日礼拝
/17(月)
/18(火)
/19(水)
/20(木)10:00聖研
/21(金)
/22(土)13-16子供ｵｰﾌﾟﾝﾊｳｽ

《祈りの課題》

①家族の救いのために
②礼拝に来れなかった人々のために
③主が教会学校の子供たちもお送り下さいますように

良書ハイライト

「隣人を自分のように愛す」

(「ｸﾘｽﾁｬﾝ新聞」20/1/9、山崎正人「これからの企業経営」<43>より)

日本では徳川時代から士農工商で知られるように、商人の地位は非常に低かったのです。その大きな理由は、商売に対する不信感と商人の倫理観でした。

日本がまだ戦国時代の頃の1594年、シェイクスピアは『ベニスの商人』を書きました。この喜劇で非常に興味深い点は、高利貸しであるユダヤ人シャイロックが、キリスト教に改宗することで減刑されたということです。日本では、渋沢栄一が商人の地位が低いことを憂い、社会的に商人が認められるよう努力し、商人に「利他の精神」を解き明かしました。ちなみに今、渋沢は新一万円札の顔として注目されており、2021年のNHK大河ドラマの主人公としても描かれます。

渋沢は「日本資本主義の父」と言われる人物ですが、「道徳的資本主義」に象徴されているように、そこには倫理観豊かな商人の姿があります。渋沢は「企業利益は客の感謝の証」であり、満足した客が提供する「心づけ」なのだと説明します。すなわち、客の満足がなくて利益はないのです。これが渋沢の利他の精神です。後藤新平の名言に**「よく聞け、金を残して死ぬ者は下だ。仕事を残して死ぬ者は中だ。人を残して死ぬ者は上だ。よく覚えておけ」**があります。渋沢は正に多くの人々を残した素晴らしい人物です。これらの人々が利他の精神を受け継ぎ、明治から昭和に道徳的資本主義を育てたのです。

道徳的資本主義は、しかし、「ステーク・ホルダー(株主)資本主義」として受け継がれました。このような資本主義は多大な犠牲を外部経済に負わせ、株主のために利益の最大化を図ったので、徳川時代の商人と同様の地位が当然な位置づけです。

これに対して2007年に誕生したBコーポレーションの経営理念は顧客・取引先・地域社会などの利害関係者全般をステーク・ホルダーとし、企業の力を世のために活用することを企業理念とし、社会や環境問題の解決へ貢献することを大きな目標に掲げています。

Bコーポレーションや渋沢の利他の精神は、聖書の「隣人愛」で置き換えられ、「隣人を自分自身のように愛しなさい」(マルコ12:31)に学ぶことができます。Bコーポレーションはステーク・ホルダー(隣人)に心を尽くし、力を尽くして商売を営みます。ステーク・ホルダーは、従業員・地域社会の人々・自然環境(自然法)・消費者を意味するのです。企業はステーク・ホルダーに支えられ、その恩恵を得てているのですから、企業利益はステーク・ホルダーのおかげでうまれるのです。

(山崎正人:アキナス大学経済学部名誉教授)